福井・一乗谷朝倉氏遺跡（いちじょうだにあさくらし）

1　所在地　福井市城戸ノ内町

2　調査期間　一〇四次調査　一九九九年（平11）四月～一二月

3　発掘機関　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

4　調査担当者　南洋一郎・佐藤　圭・水村伸行・宮永一美

5　遺跡の種類　戦国城下町跡

6　遺跡の年代　一五世紀～一六世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は戦国大名越前朝倉氏の居城、城下町の遺跡として広く知られている。本調査地は朝倉義景館の、一乗谷川をはさんで対岸の場所の字「斉藤」にあたり、一九九五年に完成した「町並立体復元地区」の北に位置する。関連史料から、字名の由来は朝倉義景の室少将の父「斎藤兵部少輔」の屋敷跡とみられる。今回の調査では約二〇〇〇㎡を発掘し、

（永平寺・大野）

南北方向の道路及び土塁石垣・門五・礎石建物八・土蔵一・井戸四・石積施設五・溝一二・暗渠三など多数の遺構を検出した。遺物の構成は当遺跡の他の武家屋敷の出土例に類似し、陶磁器・木製品・金属器・石製品などからなるが、墨書木製品は一点だけである。その他漆器手箱や小札・鍔がまとまって出土し、有力武将の屋敷だったことがうかがえる。今回報告する木簡は、南北道路西側の大規模な武家屋敷跡の青灰色粘土層から出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「背腸」　56×(47)×3.5　061

ややいびつな円形の板に二字を墨書したもので、左側の一部を欠く。当遺跡では直径五㎝程度の小型曲物容器の部品が多数出土しており、大きさからみてこれに関連する遺物とみられる。文字はこの小型曲物容器の内容物を識別するために記されたものと考えられ、サケの背わたの塩辛を指すものとみられる。（佐藤　圭）